

そっ たく
啐啄

平成29年9月1日刊行 No.13

編集・発行 大島町教育委員会

教育文化課事務局

TEL04992-2-1453

題字「井島 吉春」

～ 挑 戦 ～

教育長 谷 口 浄

挑戦という言葉や文字を見聞きすると、いつも父のことを思い出す。父の仕事は半農半漁で私たち(子ども4人)を育ててくれた。夏場は海で天草を切ることが主であったが9月には畑で種をまき、農作物が収穫出来るまでは海に行き、サザエやトコブシ、シッタカ、メッカリを採る、いわゆる潜り(もぐり)をしていた。冬場は山(畑)で絹さやえんどう(今は花卉園芸が主流であるが昭和40年～50年位までは島の農家で盛んに栽培された)作りをしていた。

夏の天草の時期になると、父の指は痛々しいほど荒れていた。天草を採りに潜る時は、腰にスカリ(網の袋)をぶら下げて潜るのだ。

それがまた、大きくて体の半分位ある。採った天草をスカリの中にカチンカチンになるまで詰込み、何十キロにもなったスカリを海から陸に上げるときは、海水を含んでいて重くとても大変なのである。そんなスカリを海の中で一日何時間も腰に付けているので、ウエットスーツの股間はヤスリをかけたようにすり切れてポロポロになる。また、もともと深いところは苦手なので「俺の潜りはポーフラ潜りだ」と言っていた。〈ポーフラ潜りって何だ?〉と聞くと、ポーフラは潜る時キュッキュッと潜って、キュッキュッと水面に顔をだす、だから「ポーフラ潜り」。なるほどうまいことを言うものだ。では、どのようにして天草を採るのか? 陸地からさほど遠くない白波がおこる岩場の近く、その白波の中で波にもまれ、岩場の上を転がるように天草をつかみながら息を止め、死に物狂いで天草を切るのである。当然、浅い所の天草は波にもまれ、陽が当たるのでかたい。指を守る指袋も破れ、指と爪の間に小石や欠けた貝殻が刺さる。毎日それをくり返すのである。

ある日の夕食後、疲れも伴って囲炉裏端で両手を挙げて仰向けに寝ている姿を見たとき、ギクリとした。全部の指に絆創膏が巻かれ、巻かれた内側から血のようなものがにじんでいた。そしてその指は、開いたり握ったりしている。滑稽にも見えたが、寝ていても潜って天草を採っている夢を見ているのか、昼間の筋肉の反射運動のせいなのか、しばらく見ていたが何も言えなくなってしまった。

冬場の絹さや作りに入ると、いつものことではあるが毎年二つのことを口にする。一つ目は「今年も失敗した!」である。マメ科の植物は連作障害をおこしやすく、毎年同じ畑で栽培することが難しい。土壌改良やその他にもいろいろな工夫が必要になるのである。これまでの経験を元にあれやこれやと考えながら、耕運・畝床・肥料・種まき・草取り・竹刺し・網張りとは次々に手間を掛け、そして種から芽が少し成長した頃に「今年も失敗した!」となる。あれだけ丹精込めて育てたのに、見た目には例年と変わらないのだが…。また、「今年は良く出来た」ということも極まれに聞いたが、その後の台風や寒波などの気候等によって大打撃に合うのだ。このように自然の脅威とも格闘しながら育てあげると、次には収穫時期に入って行くのであるが、(だいたい1月から4月くらいの間)今度は寝る間も惜しんで育った豆を摘み取らなくてはならないのである。最盛期には夜が明ける3時・4時には畑に出て、ヘッドライトを照らしながら摘み取り。「俺が畑に行くと鳥も寝ていて、指でつついて起こすのだ」という。〈鳥も寝ているところを起こされるのは迷惑だし、可哀想だからやめろ〉。夕方家に帰っても今度は取ってきた豆の選別作業をしなければならない。これがまた大変で、昼の労働で疲れて眠い目をこすりながら毎日、毎日夜の8時頃までかかる作業のくり返しである。

父は、1年365日休んだことがないほど働き者だった。私がある時父の前でおもわずため息をしたら「何だそれは!」と言い、その次には「俺は生まれてこのかた、ため息なんかついたことがない」と言われたので〈そうだろうな〉(父の日常を見ている私だから)とつぶやくことしか出来なかった。また少しの手伝いにでもなればと思い、この選別作業を手伝うと、いつものことではあるが先に述べた一つ目に続いて、二つ目には「宮本武蔵」が登場するのである。

宮本武蔵は江戸時代初期の剣術家。兵法家二刀を用いる二天一流兵法の開祖で、13歳から29歳まで60余回の勝負を行い、すべてに勝利したと記述されている剣豪である。父は仕事が忙しくなるとこの宮本武蔵

をよく引き合いに出すのである。よく出る話では「宮本武蔵は風呂に入らなかったらしいな」<どーしてよ？>「風呂に入ると気が抜ける」「武蔵は二度風呂に入った時があったようだが、その時襲われかけた」。「だけど川で行水はよくしたらしい」<じゃー、自分も風呂に入っていないってことを言いたいわけ？汚いから行水だけじゃなく風呂に入ったほうがいいよ、疲れもとれるから>返ってきた言葉は「今この忙しい時に風呂なんか入ってられない。風呂に入ったら油断して風邪を引いてしまう」とのこと。<絶句>そんな父も人生で一度だけ逃げ出したことがあったという。15歳か16歳のときで、関西の工場で働いていたが非常に厳しい職場だった。ある時、近所で火事があった。この隙を見て行李(衣類入れ)を担いでそのまま逃げたという。(もし、このとき逃げずにその会社に勤めていたら、もっと違った人生を送ることが出来たかもしれないという思いからか)このことが生涯の自分を支える糧になっていたのかも知れない。またこのような経験からか、子供たちの教育に関しては理解があった。多くは語らなかったが「教育が人を育てる・変える」という考えが身に沁みていたのだと思う。宮本武蔵は自分の「師」であり「敵」でもあり何か共鳴するものを感じていたのかも知れない。とにかく働くことが好きだった。好きだというだけでは、続けることは中々出来ることではない。同じことをするのなら少しでもよい物を、多くの物をという気持が「挑戦」することになり楽しみにもなったのだと思う。またある時、<たまには仕事を休め!>と話したら「死んだら休みはいっぱいある」と言っていたが、たぶんそんなことはなかろう。今でも畑で鍬を振っているか、それとも武蔵と互いに気が合い一杯酌み交わしているか、はたまた一戦交えているかも知れない。

最後にこれを読んでいる子ども達に次の言葉を贈りたい。
夢のある者には希望がある。 希望のある者には目標がある。 目標のある者には計画がある。 計画がある者には行動がある。 行動がある者には実績がある。 実績がある者には反省がある。 反省がある者には進歩がある。 進歩のある者には夢がある。

吉田貞雄(日本の寄生虫学者 1878~1964)

9月のはじめに

教育長職務代理者 山田 三正

夏休みが終わりました。子供たちはこの夏様々な経験をして、心身ともに成長した事と思います。一日から新学期が始まりました。子供たちは家庭中心の生活から学校生活へ戻ります。

夏休みの設置は、雑ぱくには欧米の教育体系から日本の形式を作ったので、欧米の9月始まりの前の長期休暇がその基でした。そして、昔の教室で温度も湿度も学習環境がよくなかったという理由で設置されました。

長期の夏季休業は子供頃も、そして大人になっても短い夏休みもうれしいですね。

さて、子供の生活に戻ります。この夏休みにも課題が出され色々な行事、中学生高校生は部活もあり、そして当然家族の動きもあり、なかなか忙しい生活を送った事と思います。

私が中学校教員の現役だったころ、夏休みは学習の継続にはとても厳しい時期であり一学期にやったことがほとんど生徒の頭から消えてしまうのが夏休みだと嘆く同僚の声が聞こえた事をおもいだします。「せっかくの長期休業なので、一つのことに集中して取り組む。そのためには学習も含めて他のことは少々おろそかになってもしょうがない。」すべての児童・生徒の様子がそうだとは思えませんが、ある意味一つの事実でもあったように思いました。

今の児童・生徒の様子はどうか。

夏休みの生活は自分をコントロールする好機でした。自分で考え、自分で解決する最高の課題を夏休みに実践したのです。そして9月。今大切なことがあります。それは夏の振り返りです。成長したところ、不足だったところ、成し得なかったことを総括して、今一度組み立て直すことです。家族としての役割分担の責任、一人で物事に取り組む経験、学習へ取り組むなどその全てが大切なことです。それにもまして、運動会や学芸会など行事も多い二学期です。その中でいかに取り組みが出来るか、一つの事だけでなく幅広くそして深く取り組めるようになるのが目標になります。複数の課題に対してそれぞれをしっかりと取り組めるかです。

月光で担任の先生がまず生活の調子を戻しましょうと語ってくれたと思います。夏休み中自分の生活の紺トロールや学習、活動目標への取り組みはどうでしたでしょうか。子供と一緒に夏休み中の成長したところ、不足だったところそして色々な事への取り組みについて振り返ってみる時間をとり次の行動を決めるのも、夏休みの生活の締めくくりとして大切な事の一つと思います。

「対話」

教育委員 井島吉春

昔、高校生の時、ある授業で「主人公」についての見解を書けという問題が出た。一般的に主人公とはテレビや映画の主役の事だが、そんなことを聞いてくるはずはないのでこれは茶席などで床の間に掛けられる「主人公」の公案だなと思いつつ、わざと一般的な主役についてのことを長々と書き綴り提出した。すぐに呼び出されたので、「先生、主人公については直接問答させて頂きたいのでよろしくお願いします。」と言うと苦笑いしながら一応注意されたが話は聞いてくれた。私はこの問いについては直に対話しないと真意が伝わらないと思ったから、あえて文字では解答しなかったのである。

今はメールやラインの時代。直接話せばよいことも活字にして送る。文字変換も簡単にできるし相手の状況に気を遣うこともなくいつでも送ることができる。誰だったか、電話を直接かけると相手の都合などもあり失礼になる場合があるので、メールやラインの方が手の空いた時に読んでもらえるので相手に対しても親切だ、と言っていた人がいたが、そのいつ読んでもらってもいいメールやラインですぐ返信がないと揉め事が起こることも事実である。相手のことを考えてメールやラインを使うのではなく本人が気遣いせずに便利だから使うのであり、企業から一方的に送信されてくるファックスの広告に少し似ている気がするが言いすぎだろうか。

いつだったかレストランで隣り合わせで座っている男女がラインでやり取りしていて、たまにボソボソと話し、注文もラインで相談している様子で、よほどじゃべりたくないのだろうと笑ってしまった。

伝えたいことをしっかりと相手に伝えることは容易なことではない。伝える側もわかってもらえるように誠心誠意伝え、受け取る側も相手の心中を察し理解するよう努める。簡単なようでとても難しいのが人と人との対話なのだろう。

冒頭の「主人公」とは、自意識ではなく絶対的な主体性。いかなる環境にあっても正しい自覚のうえに自主、自由で何物にも動かされず常に自己を練磨し為すべきことをしっかりとやり続ける堅固な精神を持つことを言う。

お土産

教育委員 岡山 日出子

今年の夏は日本各地で豪雨の被害が続いたニュースで始まったように思います。

元町の職場の前を観光客や海帰りの人たちが通るのを見かけると、大島の夏が来たな、存分に楽しんで大島の良さを知って帰ってくれるといいなと思います。そして、手にお土産袋を提げていると、どんな大島のお土産を選んだのだろうと想像します。

以前、知り合いのお土産物屋さんが『大島への観光客自体が減少したのはもちろんだが、お土産を買わなくなった』と言っていました。インターネット通販等で全国の特産品が手軽にお取り寄せできるからでしょうか、写真やお土産話がなくても SNS 等で旅行の内容を共有できるのでお土産物は必要ないと感じるからでしょうか。あるいは単純にお土産のやり取りをする習慣を持たなくなった？

確かに『もらって困るお土産ランキング』があるように全てが喜ばれるわけではないかもしれませんが。しかし、『お土産は物そのものより、何がいいかと相手のことを考えて選んでくれる気持ちが嬉しい』と聞いたことがあります。この数年でスマートフォンやタブレットが幅広い年齢層に普及し多方面に影響を及ぼしています。そのことも含め時代の流れに伴い『お土産』に対する考え方の変化も仕方ないことなのでしょうが・・・少し寂しい気がします。

「スポーツマンシップ」

教育委員 山本忠夫

本年4月より教育委員を拝命いたしました山本忠夫と申します。生まれは神奈川県小田原市、平成元年に29歳で大島へ。今年で丸28年経ちました。スポーツが好きで、偏ってしまうかも知れませんが、そちらの目線から、教育に少しでも携われればと思います。何卒、よろしくお願い致します。

さて「スポーツマン」という言葉を思い浮かべるとどういったイメージでしょうか？

日本では「さわやかな人…」というイメージでしょうか？欧米では「自立していて信頼に値する人」と意味で使うこともあるようです。

19世紀の後半、英国のパブリックスクールではボールを蹴りあうフットボールというゲーム（サッカーの原型）が流行っていたそうです。ただし、当時の目的はゲームを楽しむということより、むしろ勇気や荒々しさを競うものでした。その頃のルールの中には「靴先に鉄などの金属を埋め込んではいけない」というのがありました。これは相手が大怪我をするから…ですが、ということは、相手を蹴っても良いということでした。

このような状況では当然怪我也多く、上級生が下級生をいじめる場ともなっていたので、ラクビー校のトマス・アーノルド校長が「手をいっさい使ってはならない」「相手を蹴ってはいけない」などのルールを作り、野蛮なものから、立派な振る舞いを身につける教育的なものに変えていったそうです。つまりアーノルド校長は「スポーツは紳士【Gentleman】を育てる場」にふさわしいと考えたのです。

欧米で紳士的な人間を「スポーツマン」と呼ぶようになったのもうなずけますね。

その中で、スポーツマンシップは3つ…と言われます。

- 1 ルールを尊重する
- 2 審判を尊重する
- 3 相手を尊重する

この3つを尊重することで、フェアな態度でゲーム（試合・競うこと）を行うようになる。そしてゲーム（正しく競う）を尊重することは真剣さに繋がり、遊びではあるが真剣な面もあるスポーツは楽しいもの、向上できるものとして発展してきたそうです。

スポーツは頭も心も身体も向上させる。その過去には、こんな歴史があったことも知るのも良いですね。

教育委員会カレンダー－9月～12月

月	日	内 容	場 所
9	9	ジュニアスポーツフェスティバル	都立大島高等学校体育館等
10	8	大島町体育祭レクリエーション大会 予備日 10月9日(月)	つばき小学校グラウンド
	29	大島町体育祭 駅伝競走大会	大島全域
12	26	雪国体験学習(12月29日まで予定)	新潟県上越市大島区(予定)

※啐啄(そったく)とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたく音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。

そ っ た く

啐 啄

29年9月1日刊行

大島町教育委員会だより
発行・大島町教育委員会
編集・大島町教育委員会